

# がぶくドラゴン

スペイン北東部のバスク地方は、その過激な独立運動で一般には知られているが、同時に独特の協同組合が発展した地域としてもつとに有名である。本書によると、協同組合セクターは、「バスク国」で最大の雇者を抱え、協同組合銀行はこの地方で最大の金融機関となっている。なかでも、その中心であるモンドラゴン地域では、就業人口の五〇%もが、自分たちが年間所得にほぼ相当する額の出資を行う協同組合で雇用されている。先端工業製品の生産協同組合から農業協同組合、生協、保険組合、協同組合銀行など一五〇もの協同組合が「モンドラゴン協同組合グループ」と呼ばれるシステムに統一され、地域全体が協同組合の一大複合体となっている。こうしたことから、モンドラゴン(龍の山)という意味らしい)の協同組合は、労働者協同組合のモデルとして日本でも注目を浴び、研究書などもすでに幾つか出版されている。

しかし、著者によると、モンドラゴンについて書かれた既存の研究書・論文は、組合幹部からの情報に基づいており、著しく

一面的である。本書の特色は、既存の研究とは異なる一般組合員、労働者の視点から一般に流布されたモンドラゴンの理解は「神話」にすぎない、とそれを痛烈に批判していることである。モンドラゴン協同組合の経営に組合員が積極的に参加していること、一般の組合員と管理者層が高い一体感を持つていること、協同組合の組合員が一般の会社でよりも人間的に扱われていることなど、協同組合論者が理想とするようなこうしたモンドラゴンについての常識は、本書によればすべて「神話」である。

## 『モンドラゴンの神話』

協同組合の新しいモデルをめざして

シャリン・カスミア著

三輪 昌男訳(家の光協会)

だが、「神話」を批判しつつも、著者はモンドラゴン協同組合を無価値なものとして否定するわけではない。著者の「神話」批判の意図は、モンドラゴンが「権限を偽りなく労働者に移(譲)した、もっと公正な職場を本当に創り出す」協同組合の新しいモデルになって欲しい、という期待である。本書は、確かに既存研究が冒頭で挙げたような数字的なデータと組合管理者層からの情報によって作り上げ世界的に広まった「神話」を大きく修正するという点で、協同組合関係者にとって興味深いものであろう。

しかし、本書を読む中で筆者がより興味深く感じたのは、この「神話」の破壊を可能とした本書の調査手法である。著者は、文化人類学特有の参与観察法による調査を行うために、モンドラゴンに一年八ヶ月間住む。そして、地域住民と同じように生活しながら、既存の研究が見逃していた一般組合員や地域住民、独立運動の運動家などからさまざまな情報を集め、彼(女)らの視点からモンドラゴンの「神話」を崩していく。

私は、日本の農村研究あるいは農業研究には平板なものが多く魅力に乏しいという感じを以前から持っていたのだが、その理由の一つは、日本の研究には統計数字や管理者を通じた情報から組み立てられたものが多くからかもしれない。例えば、組合員の世代交代と合併により組織の大改革を迫られている農協は、組合員や地域住民、そして農協の一般職員の視点やニーズを把握しそれにどれだけ対応できるかに改革の成否が掛かっているといっても過言ではないだろう。そういう意味で、経営者の視点になりがちな日本の農協研究にも、本書のような研究方法と視点が必要だという気が強くなったのである。

(二〇〇〇年七月、一八七頁、二、四〇〇円)

(須田敏彦)